

飛鳥資料館特別展

◆春期特別展示「幻のおおでら・百済大寺」

1999年4月13日～5月30日

百済大寺は、舒明天皇が聖徳太子の遺志をうけ熊凝道場を移して造営したと伝えられる、わが国最初の勅願寺である。『日本書紀』はその創建について、舒明11(639)年7月の条に「詔して曰はく、今年、大宮及び大寺を作らしむとのたまふ。則ち百済川の側を以て宮廻とす。是を以て、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。便に書直県を以て大匠とす」と述べ、舒明11年12月の条に「百済川の側に、九重の塔を建つ」と記す。壬申の乱の後、舒明と皇極の子、天武天皇は都を飛鳥にもどし、即位の年(673)に百済大寺を移して、高市大寺を営んだ。天武6(677)年にはこの高市大寺は大官大寺と改称され、さらにまた文武朝以後には大安寺とよばれるようになり、平城京に移設されて現在にいたっている。

大変複雑な変遷をたどり、さまざまな伝承の衣をまとったこの名刹の実態は、長いあいだ謎につづまってきた。百済大寺の建てられた場所は、古くは北葛城郡広陵町百済にある百済寺であるといわれてきたが、百済大寺が造られた土地が十市郡内とされることから、奥山久米寺あ

るいは香久山西麓の木之本廃寺が、これに当たるという説もあった。その後身とされる高市大寺についても、どこにその比定地を求めるか議論が続いている。

最近では、1997年からはじまった奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の発掘調査の結果、桜井市所在の吉備池廃寺が百済大寺の有力な候補地に擬せられるようになってきた。これまでの百済大寺についての調査、考察を整理し、このまほろしの大寺の研究史を紹介する展覧会を開催した。

◆秋期特別展示「鏡を作る」

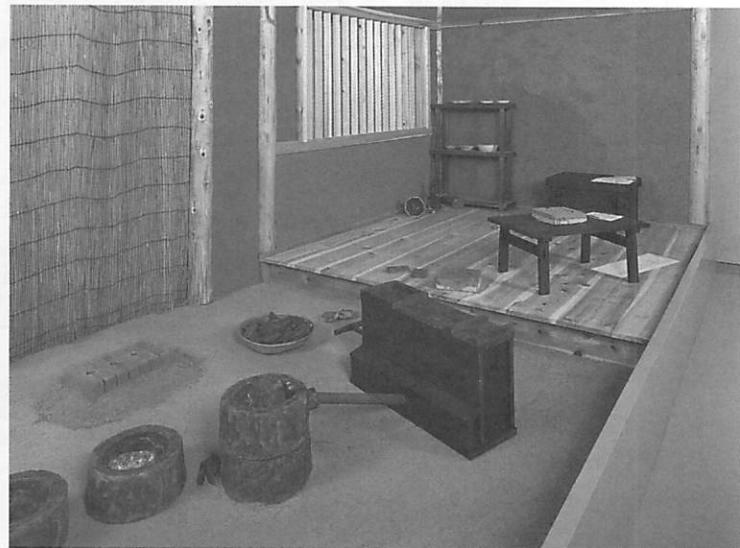
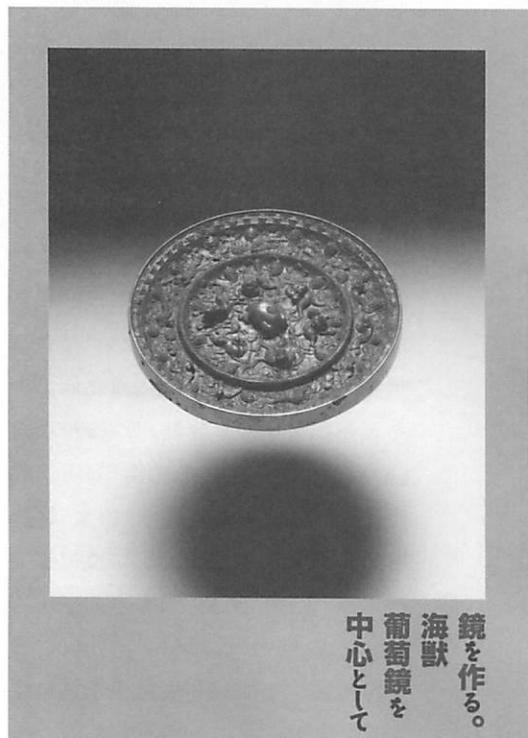
1999年10月5日～11月28日

高松塚古墳の副葬品として名が知られるようになった海獸葡萄鏡は、飛鳥時代を代表する鏡として、これまでもいくつかの展覧会で取り上げられてきた。

今回は1991年に行われた飛鳥池遺跡の調査で出土した海獸葡萄鏡の破片に注目し、当時の鏡を、その製作という視点から取り上げ展示を構成した。

展示は3部構成とし、まず奈良県下の著名な海獸葡萄鏡として、春日大社金龍社の大型海獸葡萄鏡、天理市袖之内古墓出土中型海獸葡萄鏡などを展示した。次に飛鳥池遺跡出土の鋳型を展示するとともに、当時の鏡作りの様子を復元模型で展示した。最後に展示に当たって、高松塚鏡の複製品を原型として行った、踏返し鋳造実験の成果を展示するとともに、踏返し鋳造で生産された同型鏡のいくつかを展示した。

(杉山 洋)



■特別展「鏡を作る」ポスター(左)、および展示風景(右)